

2021年9月の行事予定表

1	水		16	木	
2	木		17	金	
3	金		18	土	
4	土	礼拝式	19	日	礼拝式 (敬老の日)
5	日				
6	月				
7	火	同上	22	水	(秋分の日)
8	水				
9	木		24	金	
10	金		25	土	
11	土	礼拝式	26	日	礼拝式
12	日				
13	月				
14	火		29	水	
15	水		30	木	

教会月報

2021年9月

No.364

岡山ナザレン教会 月報編集委員会

新型コロナの終焉

「ファリサイ派の人々が、神の国はいつ来るのかと尋ねたので。イエスはお答えになった。『神の国は、観察できるような仕方では来ない。【ここにある】とか、【あそこにある】と言えるものでもない。実に神の国はあなた方の中にあるからだ。』」

ルカ福音書 17章 20-21節 (聖書協会共同訳聖書)

新型コロナウイルスが国内のみならず、世界中を襲っています。日々、感染者の数がメディアにより取り上げられ、恐怖が拡散しています。しかしながらそうした中、東京オリンピックが開かれました。再々にわたる緊急事態宣言の発出も国民には、慣れもあり緊張感や切迫感が減少し、大都市や観光地等では人流が減りにくくなっているようです。外国で発生した新型コロナウイルスは変異を遂げ、今やデルタ株等へ移行しつつあるといわれます。では、私たちにできることは何でしょうか？日々の生活で、三蜜を避け、手洗いや手指消毒、不織布マスクの着用、不要不急の外出を控えることでしょうか。

さて、今月の聖句は、ファリサイ派と呼ばれた人々がイエスに「神の国」はいつ来るのかと質問したことによります。その前提には、人間の目で見える状態を想定し、神の国がどこに現れるのかということでありました。それは、空間的に限定されるものや、ユダヤ民族とその土地に限定されるものでもないといエスは 20, 21 節で答えられます。神の国=天国は、目に見える形で「ここにある」とか「あそこにある」と言えるものではないと語られたのです。そして、神の国=天国は、あなた方の中にあるとおっしゃったのです。私たちは日々の生活に疲れを覚えます。逃れの道があればと願うでしょう。しかし、主イエスが語られるように、神の国=天国は神の支配の内にあることを受け止めていきたいと思えます

コロナもやがては終息するでしょう。それまでは忍耐が求められます。医療従事者やコロナ対応に接する方が十分守られることを祈ります。

牧師 永松 清

編集後記

- ◇ 今月号も皆さまのご協力のもと、発行できたことを感謝します。祈る種もいただきました。
- ◇ 「エリック・リデルのその後」の文中に登場したスティーブンは戦後日本に宣教師として来日し、北海道・東北で宣教しました。「あなたの敵のために祈りなさい」という言葉はスティーブンの中で生きた命となりました。
- ◇ たとえ不可能にみえても、みことばの通りにしてみることで、違った世界を見ることができるのかもしれない。

宣教師となった金メダリスト

～映画「炎のランナー」で有名なエリック・リデルのその後～

映画「炎のランナー」で有名なパリオリンピック陸上 400m の金メダリスト、エリック・リデルのその後を紹介します。

中国生まれのエリックはオリンピックの翌年 1925 年宣教師として中国に戻る。1931 年満州事変が勃発。エリックは 1941 年、家族をカナダに出国させ、中国に残るが、1943 年山東省の敵国人収容所に抑留される。収容所でもエリックは聖書の勉強会を開き、瞬く間に 10 代の若者たちの心を魅了する。その中に 17 歳のスティーブン・メティカフ(後に日本への宣教師)もいた。「汝の敵を愛せよ」と、エリックは説く。



しかし、英国の敵である日本人を愛することなどできようか。スティーブンの自伝『In Japan The Crickets Cry』によると、日本人の中国支配は凄惨を極める。西洋人は闇市で捕まっても1～2週間の独房入りで済んだ。しかし、中国人は電気柵で首を吊るされ見せしめにされた。無抵抗の中国人漁師が日本軍の戦闘機に銃撃され、殺害されるのをスティーブンは間近で目撃したこともある。若者は「汝の敵を愛せよ、という言葉は理想に過ぎない、日本人特に日本の憲兵を愛することなど現実的には不可能だ」という結論を出そうとしていた。

そのとき、エリックは静かに語った。「聖書には『汝を迫害する者のために祈れ』という言葉があります。私たちは愛する者、好きな人のために祈ります。しかし、イエスは、好きではない人のために祈りを捧げなさいと教えています」そして、こう続けた。「人を憎むとき、あなたは自己中心的になります。祈りを捧げるとき、あなたは神中心の人間になります」

スティーブンは伝説の金メダリスト・エリックから「君のシューズはもう修理できないほど、擦り切れているね」と言ってランニングシューズを手渡された。その3週間後の1945年2月21日、エリックは43歳の若さで他界。脳腫瘍だった(日本の敵国人収容所)。スティーブンはエリックからプレゼントされたランニングシューズを履いて棺を担いだ。

「日本人のために祈りなさい」。神の啓示を受けたスティーブはエリックのバトンを受け継いだ。いくら祈っても日本人の態度は変わらなかった。しかし、自分の心から怒りや憎しみが消えていくことがわかった。

「日本で抹消された『炎のランナー』の最期:木村正人」より抜粋



ニュースより

長年アフガニスタンで活動され、一昨年銃撃され亡くなった中村哲医師の「ペシャワール会」は、今回のタリバンの政権奪回により活動を中止していました。しかし、活動拠点のジェラバード州は戦闘もなく市民生活が維持されているため今月21日より活動を再開しています。(NHK ニュースウェブより)是非この働きのためにもお祈りください。

「日毎の糧」から学ぶ

S.O.姉

一日が終わり、今日の出会いや出来事を思い返す時、皆さんは聖書を開かれますか？なかなかできませんよね。永松牧師からの「日毎の糧」は、日々神様と向き合う貴重な機会と感謝しています。

8/19は「ヨエル記2:21-24」です。聖書の2章を読み、さらに、2006年「希望誌夏号」を開くと、ヨエル書は、「主は神であり、主の日は祝福の日、主の来臨の待望の書」と書かれています。永松先生の「神は絶対に信頼できるお方」という解説が分かりました。さらに、使徒言行録2章16のヨエル引用箇所も教えられ、新・旧約聖書を関連して読むという私の課題に示唆が与えられました。

もし、聖書を読んでもなかなか心に残らないと思ったら試してみてください。
① 声を出して読んでみる。
② 私への神様からの手紙だと思って読み返す。
③ 瞑想する。神様は私に何かを伝えたい。それは何？
④ わからないことも含めて正直に祈る。
聖書は糧(食事)に例えられています。成分や栄養素を知らなくても毎日摂ることが大切です。(編集部)

8月証し 母の退院

E.F.姉

昨年8月に入院したのも今回入院したのも、同じ偽痛風という関節が痛くなる病気でした。二回目なので多分薬を飲めばすぐ退院できるだろうと、救急車で運ばれている時も入院したときもそう考えていました。

痛みがおさまってリハビリが始まった時、先生より寝たきりだと聞かされ、このまま施設へ入るのを考えてくださいと言われました。これに驚き、目の前が真っ暗になりました。母が家に帰ってくるのが当たり前と思っていたからです。母にまだまだしてあげることがあるのに、このまま施設に入ってしまうと私にも大きな後悔が残ると。まるで、突然道が塞がってしまったように感じました。母を家に帰してくださいと祈りました。

『あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである』ルカ12:40

主の計画は突然現れてくる。だからいつも準備していないといけない、と強く思われました。

結局、入院後二か月で家に帰ってきました。しかし、何もできないからと要介護4になり、車イスになりました。おかゆ食に飽いてたのが、家では普通食を食べ、外食(寿司など)を好みます。

主は母が家に過ごすのを許して下さい、私も世話をさせてもらえる時間を与えて下さいました。後悔の残らない日々を送らないといけないと強く思っています。